

株式会社  
カラー新しいテクノロジーを積極的に取り入れ  
デジタルならではのワークフローを模索  
液晶ペンタブレットと共に乗り越える

## 株式会社 カラー

庵野秀明が代表取締役を務める映像企画製作会社。映像作品の企画・原作・脚本・デザイン等の開発ならびに製作・宣伝・配給を手がけ、『エヴァンゲリオン』シリーズをはじめ「日本アニメ（ーター）見本市」等の作品を制作している。また、映像クリエイターの発掘と育成、アニメーション・特撮に関する資料・技術の保存・管理・啓蒙を目指している。

[www.khara.co.jp/](http://www.khara.co.jp/)



※2021年3月時点の情報です。

©カラー

シリーズとしては四半世紀の長きにわたり、多くのファンに愛され、その集大成となる『シン・エヴァンゲリオン劇場版』の公開を迎えた株式会社カラー、ハイクオリティーな作画アニメーションのトップを走るだけでなく、近年では積極的に3DCGやデジタル作画など新しいテクノロジーを導入して更なるクオリティーの向上を目指すアニメーション制作チームは業界内外から常に注目を浴びています。

コロナウイルス禍で先の見えない映像制作現場の中で、デジタルのツールを駆使してインフラ整備から作画まで否が応でも変わらざるを得ない旧来からのアニメーション制作体制含め、ワコム製品がそのワークフロー下でどう使われていたのか、そこにも確実に変革の波は押し寄せていました。

デジタルネイティブ世代が語る  
新しい作画ワークフロー

スタジオカラーでは数々の腕利きアニメーターや3DCGスタッフを抱えています。その中でも作画部若手の谷田部透湖氏（以降、谷田部氏）はカラーには動画試験を受けて入社、その後原画から演出へと着実にキャリアを積み上げているアニメーターの一人です。

学生時代からアナログの画材だけでなく、ペンタブレットも使用して短編アニメーションなどの自主制作を続けてきた谷田部氏、大学での卒業制作の当時からワコムのCintiq 12WXを使いこなしデジタルネイティブ世代として数々の作品制作を手掛けてこられました。現在使用しているメインツールはWacom MobileStudio Pro 16を使用されています。

「デジタルの良さはまだカラーに入社する前、小規模作品を制作していた時にアナログ作画工程では必要になるスキャンやプレビューなど自分でやらないといけない作業がデジタルだと省略出来る事に気がついたんですね、液晶ペンタブレットでのデジタル作画では余計な作業をせず作画に集中できることがまず衝撃的でした。しかも、音やカット繋ぎを確認しながら作画を進められる、液晶ペンタブレットとパソコンと作画ソフトがあれば完成イメージに近い状態で作業できるのは作品の全体的なクオリティーアップにつながりましたね。」  
とデジタル作画のメリットを語ります。

従来のアナログ作画の工程も経験し紙の良さも熟知している谷田部氏ですが、特にクイックチェッカー（作画を簡易的に撮影して並べて映像として表示する機械）では何十秒といった長尺のカット、複雑なセルの合成やカメラワークのショット、そういった要素の多い作画をするケースでは的確なプレイバックが難しいとの事です。そんな複雑なカットの制作でもタイムシートもカメラワークも付けながらすぐに確認出来るデジタル作画にはアナログ作業にはない優位性を感じたと振り返ります。

## 必要に迫られるデジタル作画への対応 機密情報を扱うシステム構築の要

技術管理統括 鈴木慎之介氏（以降、鈴木氏）はスタジオのデジタル系のインフラの整備を指揮し、システム部のメンバーと共にコロナウイルス禍でのリモートワークを始めとしたデータサーバーの管理、システムサポートを一手に引き受けてきました。特に公開前の作品という機密情報を扱うだけに2020年4月の緊急事態宣言下でのアニメーション制作には気を使う所も多かったようです。

元々エンジニア出身の鈴木氏、「ピーク時には3DCG班が約30人、作画スタッフが約30人、制作やシステムのスタッフを合わせると総勢100人にも及ぶ総スタッフが安全にサーバーにアクセスして作業をするシステムを構築する事になり、スタジオで作業するスタッフ、リモートワークでの自宅作業に切り替えるスタッフ、バラバラの環境のスタッフ各々がSlackを使って全社的にオンライン環境下での作業連絡を取り合う事になりました。このような多様な環境に対応すべくリモートデスクトップサービスのスプラッシュトップを採用、強みである高速な画面転送システムを利用して社内のサーバーにある作業データにリモートでアクセスし、セキュアな環境で『シン・エヴァンゲリオン劇場版』の制作作業を継続することができました。機密情報や権限含めてシステム部が管理することになりましたが、今までデジタルのシステム整備に力を入れてきたカラーではリモート下でのPCを通したデジタルのアニメーション制作環境には意外とすんなりと順応出来た」と、鈴木氏は振り返りました。

「制作中は庵野総監督みずから映像や素材にデジタルペンで書き込んだメモで指示をやりとりする事によって、個別にフィードバックを返せるようになりリテイクの返答にかかる工程も総監督の意思がダイレクトに伝わるフローにした事で格段にスピードアップしました。これはデジタルならではの制作手法とも言えましたね。むしろ、システム部としては個々のリモート環境には差異がありましたので、導入後のサポートの方に注力しました。」

## デジタルベースでのアニメーション制作の今後 リモート作業にも最適化されたワークフローには 液晶ペンタブレットを

液晶ペンタブレットを使用する事で精度の高いデジタル作画、修正作業などが出来る事がメリットになるだけでなく、様々な働き方や選択肢を提供できるようになる一つの答えがアニメーション制作のフルデジタル化の推進です。一括して作画作業から彩色、撮影、CGまでフルデジタル作業に対応する事で働き方そのものの変革をもたらし、その中でペーパーレスな工程で生産効率を上げるには液晶ペンタブレットが最適解になります。

「もっと外に持ち出せるようにWacom MobileStudio Proのような一体型液晶ペンタブレットに対してネットワーク回線側のインフラが良くなっていくと良いですね。勿論、機密情報を扱うので紛失や情報漏えいにも気を使うのですが…リモートでの画面共有などで筆圧まで共有が出来ると面白いと思いますね。（鈴木氏）」

「一体型の液晶ペンタブレットですと作業する場所を選びませんし、最新のモデルはペンもスリムになってアニメーションの作画作業でもペンが軽くて使いやすく、過去のモデルに比べると圧倒的にペン先と液晶画面との視差が無くなっているのが年々使いやすくなってきていますね。将来的には画面サイズはこのままで、もっと軽い機体が出ると嬉しいですね。さらにユーザーが増えればもっと色々な要望も集まると思いますし、まだまだ進化が期待できますね。（谷田部氏）」

今後更に進むと思われるリモートワーク下での多様な働き方、アニメーション制作環境にはデジタル化でのツールの適切な運用、それに伴うセキュリティなどの環境整備が欠かせなくなってくる事は難しいことではありません。その中で作画作業の中核を担う液晶ペンタブレットの活用は表現の選択肢を広げるだけでなく、ワークフローの改善まで見越して更に高いクオリティーのアニメーション作品制作を加速させています。

資料請求、ならびに製品に関するお問い合わせは、こちら

<http://tablet.wacom.co.jp/biz-education/inquiry/>

### 株式会社ワコム

〒160-6131 東京都新宿区西新宿8丁目17番1号 住友不動産新宿グランドタワー31階  
電話でのお問い合わせ／資料請求は ☎0120-056-814 / Tel.03-5337-6704  
受付時間 9:00~12:00 / 13:00~18:00 (土・日・祝日を除く)

© 2021 Wacom Co., Ltd. All rights reserved.



谷田部 透湖氏 (左)  
鈴木 慎之介氏 (右)